巻頭言

会員の皆様へのご挨拶

星ヶ丘厚生年金病院院長　松永　　喬

今年も残り少なくなりました。あと1年余で20世紀は終わり21世紀に入ります。近づくmillennium（世紀の変わり目）の年を迎えて、世界的に色々な面で不安の多いこの頃であり、日本の景気はどうなるのだろうかと誰もが懐疑的で最善の策を暗中模索中であります。一日でも早く健全な社会に立ち返ることを願うばかりです。

私は現在の職に就任して約6カ月あまりで、院長職のひよこであります。このたびこの近畿病院図書室協議会の会誌に巻頭言を寄稿するように依頼をうけました。病院図書室などに関しては浅学非才の身ですので何を書けばよいのか悩みました。とりあえず当院の図書室司書で、この協議会の幹事をしている首藤佳子さんにこの会の沿革、目的、事業内容、課題、今後の展望などについてレクチャーを受けました。ここでは病院図書室や協議会の役割などについて私見あるいは感想を述べさせていただきたいと思います。

当院の病院図書室は1972年当院の改築時に設置され、当初より司書が置かれていました。1974年に近畿病院図書室協議会が設立されましたが、設立総会が当院で開催され、当院が事務局となって当時の故中島佐一院長が3年間、その後しばらくして梅垣健三院長が5年間この協議会の会長をおおせつかったと聞いています。

今年は協議会が設立されてからちょうど25周年目、四半世紀にあたります。協議会の主な事業内容は各種の医学文献情報活動、教育研修活動、出版広報活動、年次統計調査活動、重複雑誌の交換のほか、最近では他団体との共同事業としてインターネットサイトfolioの開設や病院図書館員認定資格制度の検討がなされているとのことです。また、今後の展望としてはコンピュータネットワーキング、ドキュメントデリバリーの強化、患者さんへの医学医療情報の提供、さらには電子メディアの活用、レファレンスサービスの充実など電子情報時代に即した迅速な情報提供を心掛けておられるようです。

図書室は人類の知的財産の最終の貯蔵庫で、古いもの、新しいものを問わず情報化、コンピュータ化にもっとも敏感に反応していただける機関であり施設であってほしいと思います。しかも、その利用者が医療従事者だけでなく、患者さんやその家族の皆様にも「開かれた図書室」として、電子情報化時代の恩恵を共有していただければ患者サービスにもつながると思っています。

社会常識が問われる時、「広辞苑によれば」と一般に言われますが、医学医療情報に関して「病院図書室によれば」という表現が使われ、それが医療情報の信頼性の評価となり、ある程度の権威づけがなされるようになってほしいと思っています。

図書室は知識と心の森であり、五感を使って知的な営みを育む場であると同時に出会いの場であります。従って、図書室関係者は医

療従事者、患者、家族など多種類の人々のニーズに応えるべく本の選書から始まり、その運用に今後とも配慮してほしいと思います。

Notitia librorum est dimidium studiorum（ラテン語：本の知識は研究の半分にあたる)、いい本に会えば行動としての研究は半分できたも同じであります。それと同時に、「言葉は人の基なり、書物はものの基なり、読書は考えの基なり」と言われ、図書室は文化の基本でもあります。最新の医学・医療情報の知識や技術だけでなく、最近よく言われる「心の医療」のためにも病院図書室の果たす役割は大きいと思います。

関係者の皆様の今後のご活躍をお祈りしてご挨拶といたします。